

平成29年度「中学校学力向上対策支援事業」に係る

第1回深い学びを実現する教科等別協議会（総合的な学習の時間）記録

平成29年9月7日（木） 10:00～
コンパルホール多目的ホール

1. 開会行事〔10:00～10:20〕

◎県教委挨拶【米持 武彦 義務教育課長】

8月2日、学びに向かう中学校12校の協議会を行った。自校の取組をまとめ、聞く側の生徒に対して説明するポスターセッション。日田の中学校の生徒が、「対話的な学びとは何か」と質問する。この生徒は、「対話的な学びとは何か」を学校の先生や生徒と共有し、日常の中で「対話的な学び」を意識している。「主体的な学び」も「深い学び」も学校で共通語になっている。

今の中学生は、初対面にも関わらず、他校の子どもたちと情報交換や対話ができる。これは、先生方が自分の教科あるいは総合的な学習の時間を通して、子どもたちを伸ばしていただいた結果である。今後も、子どもたちの成長を見守っていただきたい。

- ・県教育長の言葉紹介「子どもたちは未来からの贈り物。今しっかり見守り育てて未来に返す」
- ・全国学力学習状況調査結果とアンケート結果説明
総合的な学習の時間に探究的な指導を行ったかについて、肯定的な意見84%（2年間で20%増）



2. 行政説明〔10:20～10:40〕

◎「総合的な学習の時間の推進と充実に向けて」

【後藤 竜太 義務教育課指導主事】

○現行学習指導要領の成果（総合的な学習の時間）

- ・総合的な学習の時間で探究のプロセスを意識した学習活動に取り組んでいる児童生徒ほど、各教科の正答率が高い傾向にある。
- ・探究的な学習活動に取り組んでいる児童生徒の割合が増えている。（全国・大分県ともに）

<生徒質問>

- ・「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」…57.3%（昨年比6.8%増）

<指導の状況>

- ・「総合的な学習の時間で、課題の設定から始まる探究の過程を意識した指導をしたか」…83.7%
(昨年比11.2%増)

○現行学習指導要領の課題（総合的な学習の時間）

- ・総合的な学習の時間を通して、どのような資質能力を育成するかということ、総合的な学習の時間と各教科との関連を明らかにすることについては、学校により差がある。
- ・「整理、分析」「まとめ、表現」に対する取組が十分でない。
- ・地域の活性化につながるような事例が生まれている一方で、本来の趣旨を実現できない学校もある。
- ・小中学校の取組の成果の上に高等学校につながる実践が十分展開されているとは言えない状況にある。

○小学校・中学校・高等学校の学びを縦につなぐ

- ・中学校で今後必要になることは…「身に付けた資質・能力を相互に関連付ける」「適切な学習活動を行う」

○本県の問題の所在

- ・年間指導計画が学校として立案されず、その年々の学年や担任に任されていたか。
- ・行事の練習、PC練習、英会話練習、補充学習の時間等に充てていなかったか。
- ・1～3時間の、探究するほどの時間のない単元を位置付けていなかったか。



○本県に必要な改善の方向

①学校としての全体計画、年間指導計画の改善

- ・ 育成を目指す資質能力の整備
- ・ 各学年1～3程度の単元づくり
- ・ 小中連携したカリキュラム編成

②各教室での1時間の授業の充実

- ・ 「課題設定」「情報収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の探究的な学習
- ・ 探究的、協働的に学び思考力を高めるための「考えるための技法」の活用

○目標を実現するにふさわしい探究課題を設定すること

【探究課題の設定の要件】

- ・ 探究的な見方考え方を働かせて学習することがふさわしい課題であること。
- ・ その課題をめぐって展開される学習が、横断的総合的な学習としての性質をもつこと。
- ・ その課題を学ぶことにより、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくことに結びついていくような資質・能力の育成が見込めること。

○特別活動と総合的な学習の時間の関連

- ・ 特別活動の学校行事を総合的な学習の時間として安易に流用して実施することを許容しているものではない。
- ・ 探究的な学習であることが前提。

○学習指導要領等に関する移行措置並びに移行期間中における学習指導等について

【移行期間中における学習評価の取扱い】

- ・ 現行学習指導要領の下の評価規準に等に基づき、学習評価を行うこと。

3. 研究協議〔10:40～12:20〕

◎「各学校の総合的な学習の時間の取組」

【講師及び指導助言者】 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 田村 学 氏】



<単元プラン交流会>



<交流した単元プラン>【いくつか紹介】

- 教科と連携し津久見の良さを見つけよう
- 自分の住んでいる町について知ろう
- 佐伯の良さを再発見し世界に発信
- ふるさとを活性化しよう（ふるさと大分いきいきプロジェクト）
- 地域から学ぶ 国東ふるさと再発見 ～世界農業遺産の学習を通して～
- 日出町を見つめ直し「日出町活性化プロジェクト」をつくろう
- 私たちがやりたい27の別府 1UPプロジェクト
- 別府学「別府創生計画」～別府市を発信しよう～
- ふるさと創生事業（佐伯の活性化のために提言しよう）
- 私たちの郷土 竹田について学ぼう

- 郷土の先哲に学ぼう、日本の伝統文化を学ぼう
- 郷土愛 ～地域の食文化と郷土を再発見しよう～
- 郷土の伝統や文化、産業などを体験的に学ぶ ～郷土を愛し誇れる態度を身につけよう～

- 地域の人の生き方を知ろう
- 地域で生きる人々～職業調べ～
- 集団の一人として学ぼう、ふるさと町づくり～地域を知ろう～
- 坂ノ市を広めよう大作戦
- 銘茶陣ヶ原をPRしよう
- 生ごみ減らそう大作戦
- 防災教育（お家の人に家庭に必要な防災準備を知らせよう）
- 外国の人々との異文化交流
- 山梨県から参加 米作り楽しイネ 町の伝統工業を見つめて（花火作り・和紙作り）

4. 講義 「総合的な学習の時間における主体的・対話的で深い学び」

〔13:20～14:50〕 國學院大學人間開発学部初等教育学科教授 田村 学氏

○学習指導要領の改訂

- ・先生たちは自分の経験で作られた授業のイメージがある。自分のイメージは古いので発想の転換が必要である。
- ・総合が変わることで各教科の授業が変わり始めた。
- ・OECDの生徒の学習到達度調査によると日本の子どもたちは測定できる学力は上がってきている。しかし、学力は上がってきているのに米中韓の生徒に比べて自信がない。
- ・日本の子どもたちは役立ち感や自分で行動できないところに課題があるのかもしれない。

○2030年の社会と新しい学習指導要領

- ・ロボットの進化により、20年後は今の仕事の47%は機械に奪われる。
- ・2011年入学の子ども65%は現在ない仕事をしている。

- ・人材育成面での企業の期待と大学・大学院の取り組みについてで、企業が期待していることと大学が特に注力していることにズレがある。大学は専門分野の知識を学生にしっかりと身に付けさせることが80%であるが、企業は31%とそこまで高くない。チームを組んで特定の課題に取り組む経験をさせることは大学は4%とあまり注力していないが、企業は28%とこの項目に関する数値は大学とは異なる。
- ・ベネッセの調査によると保護者の意識調査で受験に役立つ学力を身に付けてほしいの項目は67.4%とそこまで高くない。それよりも社会に出て使える力を身に付けてほしい、知識・暗記だけでなく将来それを活用できるようになってほしいと考えている。
- ・学習指導要領の方向性として何ができるようになるかが大事である。
- ・全ての教科が知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等の3つの柱で整理されている。



○探求的に学び合う子どもの姿（主体的・対話的で深い学び）

- ・暗記再生型から思考発信型へと変化していかないといけない。
- ・アクティブに学ぶとは頭の中が活性化し、能動的に学ぶということである。
- ・秋田県の子どもたちは探究活動によく取り組んでいて、ただ単に反復学習をしているのではない。
- ・スワヒリ語の習熟テストの結果、テストを多くするよりもアウトプットをすればするほど頭に残るという結果が出た。
- ・長期記憶、活用型知識を身に付けるためにどのような授業をしていかないといけないか。
- ・各教科の授業で考えが高まることが大事であり、期待している力を子どもたちがつけているかが大事。そのために場面設定をどのようにするのか、授業中どのような枠組みを用意するのが大事である。

○「深い学び」を実現する カリキュラムマネジメントの充実

- ・授業中手を挙げ発表する活動は年齢が上がるほど上手いく。
- ・授業改善にむけてただ単に話し合うだけではいけない。最後のまとめは荒くないか考えないといけない。
- ・カリキュラム・マネジメントは学級担任も含めて考えないといけない。
- ・学びの地図である「単元配列表」をつくるのが大事である。配列表を作ることで教科間の横断関係が見えてくる。また活用・発揮の頻度も上がる。
- ・総合は色々な教科と関連づけやすい。
- ・総合の意欲は各教科の意欲にも結びつく。

5. 発表 「探求課題の設定と展開による総合的な学習の時間の取組」

〔15:05～15:35〕

別府市立鶴見台中学校教諭

佐藤 功二郎氏

- ・3年間を通して、ふるさと別府について系統的に学び、色々な経験の中から別府を知り、別府の活性化につなげる。
- ・1年間50時間の中で節目をつくるのが大事である。11月の文化発表会で軌道修正を行い、3月の期末PTAで発表を行う。
- ・生徒の課題決定に向けてアンケート、出会いの場（講演会など）からスタートした。
- ・ふるさと別府のよさを知り、もっと知りたいこと、もっとこうしたらいいのという課題が生まれた。（良い出会いの中から課題が生まれる）
- ・見通しを持って取り組むことが大事（9月校外学習、11月中間報告会、3月学年PTA）
- ・総合の取組を始めたときは学年の先生たちは胃が痛んだということであったが、やっていくうちにはまっぴき、すごく勉強になったし、楽しかった。
- ・熱は高いところから低いところにつながる。
- ・自分の町に誇りをもつ。

6. 指導・講評 [15:35~15:50]

- ・素晴らしい実践を持っている先生は、自分の生徒とのことを話したくなる。何か一つアクションを起こしてほしい。今日の発表でこのような成果があると佐藤先生が説明してくれた。自分たちの学びにもつながる。あとは登るか登らないかだが、一人では危険なのでチームとして仲間を見つけて取り組んでほしい。明日からの学校の取組につなげてほしい。

～所感～

- ・総合と各教科のつながりがよく理解でき、総合での取り組みが各教科での主体的・対話的で深い学びの実現に結びつくと感じた。
- ・総合的な学習に取り組むときは、生徒、地域の実態を踏まえて教職員集団がまとまり楽しむことの大切さが理解できた。

(担当：大分教育事務所 麻生、別府教育事務所 三村)